様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年６月１日現在

機関番号：６２６０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２００７　～　２００９
課題番号：１９５３０７７６
研究課題名（和文）　日本版「PISA スーツケース」の開発

研究課題名（英文）　Development of “PISA Suitcase” the Japanese Edition

研究代表者
水戸部　修治（MITOBE　SHUJI）
国立教育政策研究所・教育課程研究センター研究開発部・教育課程調査官
研究者番号：８０４３１６３３

研究成果の概要（和文）：
「PISA スーツケース」は，ベルリンにおいて開発された基礎学校向けの読解力育成のための教材集である。本研究においては，ベルリン市における実際の活用状況を調査するとともに，「PISA スーツケース」の市販版である読み方実践ボックスを詳細に分析し，その特性を生かしつつ,教師用解説や学年の発達の段階を踏まえた教材の具体化，指導のモデルとなる学習指導案等の作成を行い，我が国の教育課程に適合させた日本版「PISA スーツケース」を開発した。

研究成果の概要（英文）：
“PISA Suitcase” is a teaching material unit for Grundschule in Belin City Republic of Germany to develop children’s reading literacy.
I investigated into practical use of “PISA Suitcase” in the Berliner Grundschule. And I clarified the contents of “Praxisbox Lesen”. It is a name of “PISA Suitcase” on the market.
And I made guidance and sample of class plan to use “PISA Suitcase” the Japanese edition for teachers and make reading tools conform to every grade of elementary school in Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２００８年度	300,000	90,000	390,000
２００９年度	1,900,000	0	1,900,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	450,000	3,850,000

研究分野：国語教育学
科研費の分科・細目：教育学・教科教育学
キーワード：PISA 型読解力，ドイツ，国語科授業改善，国際情報交換，学習指導要領
教材開発，教育学，読書活動

１．研究開始当初の背景

OECDが実施したPISA2003（生徒の学習到達度調査）の調査結果は我が国の教育界に大きな波紋をもたらした。とりわけ，前回2000年調査時点の８位から14位に後退し，OECDの平均程度まで低下した読解力については，抜本

的な対応が必要な状態であり，文部科学省でも平成17年12月に『読解力向上に関する指導資料』を出している。このような対策は，小・中学校等における国語科をはじめとした授業の改善に結び付いたときにこそ，大きな効果を得られるものとなる。『読解力向上に関する指導資料』においては，「指導の改善の方向」の基本的な考え方として次のように指摘している。

「PISA調査のねらいとするところは，現行学習指導要領で子どもに身に付けさせたいと考えている資質・能力と相通じるものであることから，学習指導要領のねらいとするところの徹底が重要である。」

しかし，小・中学校における国語科学習指導の現状を俯瞰すると，「平成10年版学習指導要領」の趣旨を十分に具体化しているとは言い難い側面がある。

２．研究の目的

本研究は，我が国の児童の読解力向上のため，小学校の授業改善に機能する新しい教材を開発することを目的としている。具体的には，Landesinstitut fur Schule und Medien Berlin-Brandenburg（ベルリン・ブランデンブルク州立学校・メディア研究所）が開発した，Grundschule（基礎学校）の読解力向上のための教材集 Praxisbox Lesen（開発当初の名称は「PISA スーツケース」）をもとに，日本版「PISA スーツケース」の開発を目指す。本研究期間内には，以下の点を明らかにする。

(1) ベルリン州（市）の Grundschule における Praxisbox Lesen の実際の活用状況を分析する。
(2) Praxisbox Lesen を日本の教育課程に適合させた，日本版「PISA スーツケース」を試作する。
(3) ワーキンググループの協力者との協力の下，試作品を改良し，普及版を開発する。

３．研究の方法

(1)「PISA スーツケース」の特徴の解明

2007 年 11 月 30 日から同年 12 月８日にかけて，ベルリン・ブランデンブルク州立学校・メディア研究所及びベルリン市内の基礎学校２校を訪問し，聞き取り調査を行った。基礎学校２校では，「PISA スーツケース」の市販タイプである読み方実践ボックスを活用したドイツ語の授業も参観した。

また読み方実践ボックスの特徴を解明するため，上記現地調査の際に読み方実践ボックス１式を入手し，日本に持ち帰って翻訳した。

さらに，2009 年６月 19 日から同年６月 27 日にかけて，ベルリン・ブランデンブルク州立学校・メディア研究所及びベルリン市内の基礎学校２校を再度訪問し，現在の開発と活用の状況を把握するとともに，下記日本版の試作品を元に研究交流を行った。

(2) 日本版「PISA スーツケース」の試作品の開発

ベルリンで開発された「PISA スーツケース」の特徴の解明と並行しつつ，我が国の教育課程，とりわけ 2008 年 3 月に公示された新小学校学習指導要領・国語に適合した日本版の教材を開発した。

開発に当たっては，小学校国語科授業実践に精通したメンバーによるワーキンググループを組織し，教材開発の方向性とその具体化に向けて検討を行った。

具体的な開発の指針は次の通りである。

①単元として開発する

教科書教材を中心教材としつつ，PISA スーツケースの教材を言語活動として組み込んだ単元を開発した。教科書教材を中心教材としたのは，本研究の成果を普及する際に，小学校国語科の授業において広く実践可能な形にするためである。そのため，教科書教材の選定にあたっては，現行の小学校国語教科書において，できるだけ複数の教科書に採用されている教材文を取り上げることとした。

また，教材として単独で提示するのではなく，ひとまとまりの単元として開発したのは，本研究の成果を，単発の授業アイディアとして提示するだけではなく，児童の実態や教材の特性に応じて，授業実践の主体者である教師自身が柔軟に加工・修正して活用できるものにするためである。

②学習指導要領との関連性を明確にする

単元の開発に当たっては，それぞれの教材が，どのような読む能力の育成に資するのかを，新学習指導要領・国語の，各学年の指導事項との関係を明示することによって明らかにした。

このことにより，本研究の成果を広めていくことが，新学習指導要領・国語の趣旨を実現することに直結したものになるようにした。

４．研究成果

(1) 「PISA スーツケース」の概要

「PISA スーツケース」は基礎学校向けの読解力向上のための教材集である。ドイツ連邦の教材販売会社，Schroedel 社から「読み方実践ボックス」（Praxisbox Lesen）という製

品名で市販されている。

入門編及び８つの下位項目で構成されており，その内容は以下の通りである。

入門編（Einführung）

① 読むことへの関心（Leseinteresse）
② 読解の演習(Leseübungen)
③ 読む手順(Lesestrategien)
④ 読解課題に対応して読む(Leseaufgaben)
⑤ 読むプロセス(Leseprozesse)
⑥ 読む文化(Lesekultur)
⑦ 保護者との連携(Eltern)
⑧ 自己評価シートで診断(Diagnose)

ここでは，「読むプロセス」について詳述したい。

「読むプロセス」には，具体的な読書活動のアイディアが提示されている。「本の小箱」「緋色の糸」「読書ロール」などといった具体的な読書活動ツールで構成されている。読み方実践ボックスの中には，一つ一つのツールのモデルとその使用方法の解説が納められている。

【写真 1】「読書ロール」

例えば「読書ロール」についての解説は以下の通りである。

【読書ロール die Leserolle】

「読書ロールは，（中略）読者が一定の期間に読んだ本の記録箱でもあります。子どもたちは自分の興味に応じて，読みたい本（子ども向け小説や解説本）を選びます。読書と並行して，もしくは読書の後で子どもたちは課題の中から選択した必須・選択課題の答えを読書ロールの記録用紙に記録していきます。読書ロールの外側には読んだ本に応じて絵やデザインを加えて，誰もがその内容が見たくなるような形に仕上げます。（中略）読書ロールが完成したら，子どもたちはクラスで結果を発表します。セロテープでつなぎ合わせた読書に関する課題の答えが巻物になっているのを見ると，子どもたちの意欲がさらに掻き立てられます。」

これらは，2000 年の「PISA ショック」を受けてベルリン・ブランデンブルク州立学校・メディア研究所が開発・教材化したものであり，我が国の国語科の授業改善にも資する内容を多くもつと考えられる。

(2) ベルリン・ブランデンブルク州立学校・メディア研究所における 2007 年調査時点での「PISA スーツケース」の開発状況

ベルリン訪問調査によって，「読むプロセス」について，例えば以下のように開発が進められていることが分かった。

①本のショーウィンドウ

本のタイトルや作者，子ども自身の名前を書き，本の中で一番気に入った場面を描いてショーウィンドウの形にするもの。訪問調査当日に見た作品例の場合，本の書き出しと終わりの文章を書き写している。また，読んだ感想を記述する。書き方は学年に応じて難易度に差を付けている。最後に，自分自身で読んだのか，読んでもらったのか，読み聞かせを聞いたのかをマークする。高学年では，ショーウィンドウの場面を下に解説している。

②本の劇場

子どもが自分で選んで読んだ本の，一番気に入ったシーンを劇場のように描く。登場人物についても描く。読んだ感想なども記載する。課題としては，選んだ場面を対話形式のシナリオに書き換える。人形劇にして友達の前で演じ，自己評価したり感想を言ったりする。

(3)ベルリン市の基礎学校における「PISA スーツケース」活用の実際

基礎学校を対象とした調査により，「PISA スーツケース」が市内の基礎学校において日常的に活用されていることを確認することができた。

以下は，市内基礎学校における調査結果から明らかになった状況である。

【第３学年・ドイツ語授業における「読書ロール」を活用した学習指導の実際】

①視察結果

ベテランの女性教師による指導。１年生から持ち上がりの学級である。子どもたちはこれまでにも「読書ロール作り」の学習を経験している。今回の学習は３年生になって初めて取り組むもので，学級全体で２冊分の読書

ロールを共同制作するというものである。

まず『私の大好きな動物』『海賊の話』の２冊から１冊を選んで読む。それぞれの本には，短いお話がいくつか載せられている（『私の大好きな動物』では「飛びたい鳥」「ちっとも危なくない鮫」などの文章を掲載）。子どもは本の中で一番気に入ったお話を選んで読む。その後，なぜ気に入ったかという理由を書く。本の挿絵はコピーして子どもに配布する。

前時は自分が選んだお話を要約した。書いた要約文は，家で両親にも読んでもらっている。本時はそれを清書している。子どもが選んで読んだ本のタイトルと要約文，一番印象に残る場面の挿絵をまとめて巻紙に貼り付ける。（写真２）そのお話を読んだことのない子どもが要約文を読んで，どんなお話かを知ることができるようにする。教師は個別指導を重点的に行う。

次時以降は，グループに分かれて読書ロールを使いながら子どもが他の子どもたちに読み聞かせを行う。テキストは寄付されたもので教材室に１学級の児童数分をそろえている。

【写真２】自分の選んだお話の要約文と大好きなさし絵をロールに貼る児童

②考察

読み方実践ボックスが基礎学校において実際に活用されていることを確認することができた。聞き取り調査では，ベルリン市内では広く普及しており，ドイツ語の授業でよく用いられていることが明らかになった。指導に当たっては，「PISA スーツケース」の開発の考え方にもあるように，「子ども自身が本を選んで読む」という過程を重視していることが分かる。本授業のように共通テキストを用いる場合でも，その中で自分の選んだお話を紹介するという学習場面を構想している。

また，文章を要約する場合も，ロールに貼り付けて友達に紹介するという目的性を明確にしており，子どもの主体的な読むことの学習を実現している。

なお授業者は，読み方実践ボックスにある「読書ロール」の基本的な使い方を子どもの実態に応じて応用し，新たな指導方法を創造している。読み方実践ボックスが単なる教材集ではなく，授業改善を促す手がかりを与えるものとして機能していることがうかがわれる。

(4)我が国における読書ツールの開発

上述したベルリンにおける開発の状況を踏まえて，我が国の小学校国語の教育課程に適合した読書ツールを開発した。ここでは，「本のショーウィンドウ」（写真３）の開発について述べる。

①本のショーウィンドウの特徴

「本のショーウィンドウ」は，本を紹介するための立体的なパンフレットである。その特徴として，以下のことが挙げられる。

・自ら本を選んで読み，その本について紹介するという，一連の読書活動を具体化するツールである。
・前面中央部に，気に入っている場面，紹介したい場面などを描くことで，その場面をより意識して読むというスタイルを取る。
・前面の左右のスペースと裏面には，本の題名や作者など，基本的な情報を記載するが，それ以外は児童の発達の段階と指導のねらいに応じて柔軟に書き込む項目を設定することが可能である。例えば次の写真は，第６学年で試行したものである。ショーウィンドウの右側には「一番魅力的な場面の紹介」を書くこととしている。

【写真３】「本のショーウィンドウ」

②小学校学習指導要領・国語（平成２０年３月公示）との対応

上記の特徴から，小学校学習指導要領・国語「Ｃ読むこと」との対応において次のような関連性が挙げられるものである。

・書き込む項目の設定の仕方によって，第１学年から第６学年まで幅広く対応可能である。

・指導事項の系列では，各学年の「文学的な文章の解釈に関する指導事項」「自分の考えの形成及び交流に関する指導事項」「目的に応じた読書に関する指導事項」などを指導するための学習活動としてふさわしいものである。

例えば上掲の写真の場合，ショーウィンドウの右側に「一番魅力的な場面の紹介」を書くという活動を通して，第５学年及び第６学年「Ｃ読むこと」の指導事項「エ　登場人物の相互関係や心情，場面についての描写をとらえ，優れた叙述について自分の考えをまとめること。」を指導することが可能となる。

また，例えば下記のような，各学年に示した「Ｃ読むこと」の言語活動例を具体化するものでもある。

第１学年及び第２学年

オ　読んだ本について，好きなところを紹介すること。

第３学年及び第４学年

エ　紹介したい本を取り上げて説明すること。

第５学年及び第６学年

エ　本を読んで推薦の文章を書くこと。

③具体化に当たっての留意事項

このツールは，児童に上手な紹介パンフレットを作らせること自体が目的なのではない点に留意して指導に活用する必要がある。具体的には次のようなことが挙げられる。

・どの学年の児童に対して，どのようなねらいで（どの指導事項を取り上げて）指導するのか）を明確にすること。
・指導のねらいにふさわしい，具体的な項目を設定すること。
・単元全体を通してこの言語活動を位置付けて，主体的に読むことができるようにすること。

特に，まず教材文をしっかりと場面ごとに読み取ってから，自由に本のショーウィンドウを作らせるのではないという点に留意する必要がある。

従来は，何らかの言語活動を単元末に位置付けても，中心教材を場面ごとに詳細に読むだけになり，その言語活動を実際に遂行できる能力を育成してこなかったケースが多い。

本のショーウィンドウを作るには，「本を選ぶ力」「好きなところを意識して読む力」「ストーリー全体を楽しむ力」等が必要となる。

指導のねらいに応じてこうした読む能力を，単元全体を通して確実に育成する必要があるのである。そのためには，中心教材を場面ごとに読むだけではなく，例えばストーリー展開をつかんだり，自分の好きなところを見付けたり，なぜ好きなのかを考えて読んだりするといったことを可能にするような指導過程を構想する必要がある。

(5)読書ツール手引き書の開発

続いて，上述したような読書ツールを国語科の授業において活用しやすくするため，以下のような手引き書を作成した。

【本のショーウィンドウを作ってみよう（高学年向け・物語）】

①ねらい

・好きな物語の基本構造（題名，登場人物の相互関係，あらすじ，場面設定等）を押さえて読む。(5･6 年　エ)
・物語の中で最も魅力的な場面を意識して読む。(5･6 年　エ)
・好きな本を読んで考えたことを紹介し合い，自分の考えを広げたり深めたりしながら読む。(5･6 年　オ)
・目的に応じて，複数の本や文章などを選んで読む。(5･6 年　カ)

※（　　）内は学年と指導事項の記号を示し、学習指導要領国語における位置付けを明示している。

②準備するもの

お気に入りの本，画用紙（８つ切り），色鉛筆，はさみ・カッター，のりなど

③作り方

・子ども自身が読みたいと思う本を探します。
・本を読んで自分の「一番魅力的な場面」を選び出します。
・ウィンドウの右側に「作者」「出版社」「選んだ理由」などを書きます。
・ウィンドウの左側にあらすじと選んだ魅力的な場面の説明を書きます。
・表紙には，自分の名前と選んだ本の題名，ストーリーにかかわりの深い挿絵を描きます。
・裏表紙には読んだ本の感想やおすすめの言葉を 200 字程度で書きます。
・ウィンドウ枠の外側の線に沿って切り取ります。その後，枠の内側の線に沿って切り取り，選んだお気に入りの場面の様子を描きます。
・描いた場面をウィンドウに貼り付けます。
・型紙を縦半分に折って点線に沿って切り，折り目に沿って折れば，立体的な本のショーウィンドウのできあがり。

④活用方法

国語科の授業で活用する場合は，まずどのような読書力を付けたいのかを明らかにすることが大切です。付けたい読書力を高められるように，以下のような指導過程をもとに重点的に取り扱います。

・子ども自身が本を選ぶ過程を重視し，本の題名や種類，著者や背表紙等に着目して，大好きな本や興味をもった本を選書できるようにしましょう。
・本を通読した後，「本のショーウィンドウ」を作りながら，「好きな場面」やその場面を選んだ理由を意識しながら何度も再読できるようにします。外観を重視するのではなく，「紹介するために作る」という作業を通して，何度も読み返しながら自分の読みを形成していくことを重視します。
・完成後は，お互いに紹介したり，学校図書館に展示したりします。

(6)　まとめ

本研究においては 2007 年及び 2009 年の 2 度にわたり，延べ４校のベルリン市内の基礎学校を訪問し，授業参観及び校長・教員への聞き取りにより，「PISA スーツケース」の市販版である「読み方実践ボックス」の実際の活用状況を把握した。

その結果，「読み方実践ボックス」がベルリン市内の基礎学校において，ドイツ語の授業改善のツールとして幅広く用いられていること，特に熟練の教師はツールを指導のねらいや学級の実態に応じて柔軟に使いこなしていることを明らかにした。

併せて，ベルリン・ブランデンブルグ州立学校メディア・研究所の開発担当者への聞き取り調査により，ドイツ語教育を専門とする教師たちの授業改善を集積して「PISA スーツケース」が開発されたこと，その後も当研究所において新しいツールの開発が続けられていることを解明した。

日本版を開発するに当たっては，我が国の教育課程に適合させるため，平成 20 年 3 月公示の小学校学習指導要領・国語の「Ｃ読むこと」の領域の指導事項及び言語活動例との密接な関連のもと，児童に読む能力をはぐくむため，一連の読書活動を具体化した読書ツールと指導の手引き，モデルとなる授業事例を開発することができた。

特に，オリジナルの「PISA スーツケース」にはない改良点として，小学校学習指導要領の枠組みを援用しつつ，指導のねらいや児童の発達の段階に応じたグレードを設定することに成功した。こうしたことから，本研究は，我が国の国語科教育が抱えてきた課題である，文学的な文章における狭い学力観に偏る指導を打開するための，小学校段階における一つの有効な手立てを提示できたと言えよう。

５．主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 水戸部修治，村山智栄美，本が大好きな子どもを育てる「読むこと」の授業づくり，初等教育資料，査読無，№857，2010，pp.52－57

② 水戸部修治，ベルリン市の基礎学校における「PISA スーツケース」の活用状況と日本版開発の可能性，国立教育政策研究所紀要，査読有，第 138 集，2009，pp.183－194
http://www.nier.go.jp/kankou_kiyou/kiyou138-18.pdf

③ 水戸部修治，日本版「PISAスーツケース」の開発に関する基礎的研究，山形大学紀要(教育科学)，査読有，第 14 巻第 3 号，2008，pp.99－109
http://www.lib.yamagata-u.ac.jp/kiyou/kiyoued/kiyoued-14-3/image/kiyoued-14-3-099to109.pdf

〔学会発表〕（計１件）

① 水戸部修治，日本版「PISAスーツケース」の開発に関する基礎的研究(2)，全国大学国語教育学会第 114 回茨城大会，2008 年 5 月 31 日，茨城大学

〔図書〕（計１件）

① 水戸部修治，日本版「PISAスーツケース」の開発　研究報告書(私家版)，2010，全 72 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

水戸部修治（MITOBE　SHUJI）
国立教育政策研究所・教育課程研究センター研究開発部・教育課程調査官
研究者番号：80431633